

〈学術研究集会傍聴記〉

日本フットボール学会 16th Congress 傍聴記

池田 隼*

Hayato IKEDA*

2018年12月23日から24日まで、順天堂大学さくらキャンパスで開催された日本フットボール学会16th Congressに参加した。

1日目は基調講演やシンポジウム(テーマ「傷害予防とコンディショニング」)等が行われた。

2日目は口頭発表やクリスマス特別シンポジウム(テーマ「Road to Qatar 2022」)が行われた。

基調講演では、東京大学アメリカンフットボール部ヘッドコーチの森清之氏(タイトル: チームビルディング)の講演を聞いた。特に印象に残っている内容としては、「教育とは?」といったものである。森氏の教育とは、「なってみないと分からない。教育とは事後的にしか評価できない。学んで成長した後にはしか自分のしたことの意味が分からない。」と説明された。私自身の考え方は、「将来像から逆算し、今すべきこと、取り組むべきことを選択していく」といったものであった。森氏の話では、「まずはやってみる、やってみて事後にどう感じるか」といったものである。物事に挑戦する時に対照的な考え方だと感じたが、どちらも重要な考え方だと思っている。しかし、これからの若者が社会に出ていくための準備を行っていく過程で、自分で道を選び、自分で決断していく力はとても大切である。挑戦していくためにも、今どう感じているのかを大切にしながら、過程の中で気づかせてあげること、様々な観点から物事を捉えられる力を育むことが重要であると改めて感じるものであった。

シンポジウムは「傷害予防とコンディショニング」

というテーマで、ファシリテーターの斎田先生、シンポジストの池田先生、高澤先生、長尾先生、井澤先生、宮森先生、深尾先生の計7名によって行われた。ケガの予防について、それぞれの先生方の経験や研究されている専門分野について、一般の方にも分かりやすい内容で話していただいた。その中でも、特に印象に残った話が3つあった。1つ目は、池田先生が「選手が疲れた時に疲れたと言える環境をつくるのが重要である。」といったものである。これには、選手とメディカルスタッフの人間関係だけではなく、選手と監督および全てのスタッフの関係性が大切になってくると思った。選手が自分自身の情報を正直に伝えられる環境は、傷害予防の要素の1つになると思った。2つ目は、高澤先生が「究極の傷害予防は、選手自身が準備することである。」といったものである。日々のトレーニングや試合など選手自身がどれだけ良い準備をして臨めるかは、傷害予防だけではなく、トレーニングの質の向上にもつながる重要なことだと思った。3つ目は、斎田先生が「傷害予防にはチーム全体の協力が必須」といったことである。この話からは、メディカルスタッフと監督との連携が重要であると感じた。メディカルスタッフの意見をどのように判断し、決断するかはすべては監督しだいである。実際のスポーツ現場において、監督の権限が絶対的なものになるが、メディカルだけではなく、それぞれの専門的な知識を持ったスタッフが相互に意見交換を行うことは極めて重要である。

今回、世界的にも活躍されている先生方の話を聞いたことは、私にとってとても刺激的であった。今後も、このような場に積極的に参加し、考え方や価値観の幅を広げていきたい。

* 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科 博士後期課程1年
Graduate School of Health and Sports Science,
Juntendo University